

「苦難の中で一勇気を出しなさい」

ヨハネによる福音書 16章 31～33節

聖学院キリスト教センター所長・聖学院大学政治経済学部チャプレン 菊地 順

イエス・キリストは、「あなたがたには世で苦難がある」と語っています。それは、真実ではないでしょうか。歳を重ねるにしたがい、この世の悩みから解放され、いつもすがすがしい気持で生きることができたらと、誰もが思うのではないかと思います。しかし、そうした人生を送ることができる人はごくわずかなのではないのでしょうか。それどころか、人生の終わりまで、死の間際まで、人間はいろいろなことに悩まされ続けるのではないのでしょうか。イエス・キリストの生涯は、その最後において、最も深い苦悩に苛まれた人生でありました。最後は、人々の罪を担って十字架につけられ、深い苦悩と肉体的な痛みの中で、その生涯を終えられたのです。

ところで、今日の聖書箇所、イエス・キリストは「勇気」ということを語っています。33節の後半で、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と語っています。イエス・キリストがこの言葉を弟子たちに語ったとき、イエス・キリストはすでにご自身の最期を覚悟されていました。一人の弟子の裏切りを通して、祭司長や律法学者たちの手に渡され、命を失うことを覚悟していたのです。それは、イエス・キリストにとって、決定的な危機でありましたが、それはまた同時に、弟子たちにとっても同じでした。自分たちが「主」と仰ぎ、「先生」と慕ってきたイエス・キリストがいなくなることは、交わりの中心を失い、交わりそのものが崩壊して行くことを意味していました。正にバラバラにされようとしていたのです。そして、バラバラにされて行く中で、深い絶望と不安に引きずり込まれようとしていたのです。そうした中にいた弟子たちに対して、イエス・キリストは、「勇気を出しなさい」と語ったのです。

「勇気を出しなさい」。これは深い慰めに満ちた言葉ではないでしょうか。しかし、これは、弟子たち以上に深い孤独の中に置かれていたイエス・キリストが語られた言葉であったのです。このところで、イエス・キリストはこう語っています。「あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている」。弟子たちがバラバラに散らされて行く中で、イエス・キリストは一人とされ、深い孤独の中に置かれようとしていたのです。しかし、そのイエス・キリストが、「勇気を出しなさい」と語ったのです。それは、その本質においては、イエス・キリストは決して孤独ではなかったからなのです。先ほどの言葉に続き、こう語っています。「しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ」。「父が、共にいてくださる」、父なる神が自分と共に

おられる、この確固とした確信こそが、この時、イエス・キリストを支えた力であったのです。そして、それこそが、生きる勇気の源であったのです。イエス・キリストは、その勇気をもって、またその勇気の中から、弟子たちに対して、「勇気を出しなさい」と語られたのです。

勇気には、この絆があるのです。それは、イエス・キリストにとっては父なる神との絆でした。そしてまた、弟子たちにとっては、イエス・キリストとの絆でした。そうした絆、交わりが勇気を生み出すのです。そして、それが、聖書が語る勇気なのです。聖書には、勇気という言葉がしばしば出てきます。また直接勇気という言葉ではなくても、たとえば「強く雄々しくあれ」という言葉が語られています。そして、その多くが、今触れたような、深い絆に基づく勇気なのです。そして、そうした勇気こそが、この世に打ち勝つ力なのです。イエス・キリストは、弟子たちに、「わたしは既に世に勝っている」と語っています。イエス・キリストにとって、この世とは、自分に敵対し、自分の命すら奪おうとしていた世界です。その世界に対して、イエス・キリストは「わたしは既に世に勝っている」と語ることができたのです。そして、弟子たちにも、勇気を持ってこの世に勝利するように、励まされたのです。

東日本大震災後、「絆」という言葉が多く聞かれるようになりました。人と人とを結ぶ絆、それは人々を絶望と孤独から救い出す大きな力となっていきました。そうした人間同士の絆に神との絆が伴えば、その力は倍増されていくのではないのでしょうか。そして、たとえ人間同志の絆が得られないとしても、神との絆があるところには勇気が沸き起こってくるのです。そして、それは、苦難を克服する力となるのです。

主イエス・キリストの父なる御神、秋学期が始まり、日々の歩みが守られておりますことを感謝いたします。また、先々週と先週、対面授業を通して、多くの仲間たちがいることを改めて知らされ、感謝いたします。いま、コロナウイルスの困難な時期を過ごしていますが、人と人との交わりを深める中であって、互いに励まし合い、支え合って歩んでいくことができますよう、導いてください。また、何よりも、あなたがわたしたちと共にご一緒に歩んでいくことを信じ、勇気を持って日々の生活を歩んで行くことができますよう、励ましをお与えください。主イエス・キリストのみ名によって、お祈りいたします。

2020年10月8日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」